



木の声に耳を傾ける和田さん

輝いています

樹木医

ひと

和田 正人 さん

まちと緑に寄り添いたい

「蔵」 つて緑が少ないんですよ。だからこそ一本一本の木をたいせつにしないとね」と話すのは、和田正人さん（68歳・南町4丁目）。物言わぬ木々と向き合い、病気のサインを見つけて回復に導く樹木医として、街路樹の診断などこれまで診てきた樹木は2000本以上に上ります。

和田さんが樹木医を志したのは20年以上前のことです。仕事の帰り道、病で弱りながらも凜と花開いた桜に魅せられ、一念発起し造園会社に転職。時間を見つけては勉強を重ね、樹木医の資格を取得すると、行政機関や企業からの依頼を受けて県内外の街路樹など多くの木を診てきました。

そんな和田さんは市内の樹木とも深いつながりがあります。毎年、『中仙道蔵宿・苗木市 藤まつり』（お知らせ版1頁）で公開され、親しまれている三学院の藤もその一つ。「樹齢100年以上といわれるこの地域の宝を守りたい」と、仲間の職人とともに、傷口に腐敗防止の墨を塗布したり、腐りかけの枝を剪定したりと、約15年、主治医として根気よく接してきました。そうしかかいてもあり、藤は市の天然記念物に指定され、その後、全国でも珍しい健康優良樹に県内で唯一選ばれています。

更に、市民活動に取り組み人と人材を求めるとを結び、わらびネットワークステーションのつながるバンクに登録し、蔵の樹木の魅力など、さまざまなことを伝えようと企画中です。6月16日の『ポラントニア・市民活動見本市』では、桜を枯らす外来の害虫『クビアカツヤカミキリ』や、ここ最近拡大するその被害について緊急レポートを発表します。

花が薫り、緑まばゆくなるこの季節。「樹をたいせつに思う人の気持ちに伝えたい」と、意欲を燃やす和田さん。その思いが実るまで地域に根ざした活動を続けていきます。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.23 —



暁翠筆「円窓 子とろ遊び」絹本着色

暁斎の娘・暁翠が「子とろ遊び」をする子どもたちを描いた掛軸です。子とろ遊びとは、鬼ごっここの一種で、列のいちばん前の「親」の後ろに「子」が並び、「鬼」が列のいちばん後ろの子を捕まえようとすることを「親」が手を広げて防ぐ遊びです。実は、この遊びは、古く平安時代に天台宗の僧・恵心が考案したとも言われ、仏教と関わり

深い遊びのようです。小さな作品ですが、子どもたちの表情や動きの描き方に、暁翠の愛情があふれています。

Kyosai Kawanabe

現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい 河鍋 暁斎 天保2年(1831) ~明治22年(1889)



展示会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



河鍋暁斎記念美術館 4月25日(水)まで 「あそびつくし」展

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 木曜日 毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般500円 中学生～大学生400円 小学生以下200円 (20人以上の団体は要予約)
詳細 = 同館 ☎441・9780